

砂鉄から剣を造った鍛冶師

神栖市の東側は、太平洋に接する鹿島灘である。この鹿島灘で戦時中、砂鉄が採れたことを示す貴重な写真が『写真集 波崎町の歴史』に載っている。

モンペ姿の女性たちが数台のトラックを押している写真で、キャプションには「砂鉄工場における女子青年団の勤労奉仕」とある。

「砂鉄工場」とあり、近くで砂鉄事業が行われていたことを示している。『波崎町史』によると、昭和18年(1943)、財政目的で波崎町が砂鉄の「砂鋳権」を取得し、同町内の「日本特殊鋼材工業(株)と契約を結び、これに砂鋳権を使用させることに決する」とある。

写真は、女子青年団が砂鉄を同鋼材工業の工場に運んでいる姿をとらえたものだった。『同町史』は運んでいる砂鉄の採取場所を明記していないが、町内の砂浜から採取した砂鉄とみて間違いはない。というのも、古代から神栖・鹿島市域の海岸は、砂鉄が採れる

浜として有名だったからである。

8世紀前半に成立した『常陸国風土記』は、鍛冶師の「佐備大麻呂」らが「若松の浜」から採った浜砂鉄で剣を造ったことを記している。その部分を『波崎町史』から引用する。

「慶雲元年、国の司、姦女朝臣、鍛、佐備大麻呂等を率て、若松の浜の鐵を採りて、剣を造りき」

「若松の浜」の場所について『神栖町史』は「神の池の東方から南方の波崎町北部まで続く海辺の丘陵をさしたものとみている。ちょうど、鹿島港南公共埠頭地区あたりの海岸から、波崎漁港方面の海岸に相当する区間とみられる。

注目される点はこの剣の所在である。なんと、この剣が鹿島神宮所蔵の国宝「劔靈剣」と呼ばれる「直刀」ではないか、というのである。『波崎町史』、『神栖町史』ともまったく同じ指摘をしている。

佐備大麻呂

Sabino Omaro

「国宝の直刀は、『常陸国風土記』の若松の浜の砂鉄で剣を造った記事の年代とほぼ製作年代が一致し、もとより、この直刀がこの時に造られた剣である証拠はないものの、この風土記の記事の背景の下で製作された直刀であることをうかがわしめるものとなっている」(『神栖町史上巻』)。

『波崎町史』も「国宝の直刀など鉄製の品々は若松の浜での砂鉄を原材料として造ったことの史的根拠はないにしても、年代的には一致を見ている。したがって、古代の波崎町域から採掘された砂鉄が用いられていたことの可能性が多分に推定できるのである」と。

新羅からの渡来人とされる佐備大麻呂たちが造った剣が本県を代表する国宝であるとしたら鍛冶師、大麻呂の業績は時を超えてさん然と輝くであろう。しかも、この砂鉄の浜の延長線上に鹿島臨海工業地帯がある。そこには日本を代表する製鉄メーカーが進出している。

まるで「鉄の絆」は、時を超えて鹿島灘の地で、堅く繋がっているかのようである。(文中敬称略)

主な参考文献

『波崎町史』(平成3年発行)。『写真集 波崎町の歴史』(昭和55年発行)。『神栖町史上巻』(昭和63年発行)等。



鹿島灘に面して砂浜が広がる日川浜海岸＝神栖市日川(筆者撮影)

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一

偉人から読み解く「レガシー」のヒント